

没書物語

渡辺美知夫

没書物語

渡 辺 美 知 夫

ここ数十年の間に、私は何度か新聞などに投書を試みたことがあるが、殆んどは梨のツブテで、空しく没書ということになった。それが度重なる、段々投書という手間をかける意欲もなくなつて、今日に及んである。只一度採用された際にも、その反響は私の意図とはかけ離れたものになった。勿論これは私の提言がレベルが低いと見做されたり、表現力が十分でなかつたことも多かつたのであろうが、中には当面の問題にするには時期尚早と見られたものもあつたのではないかと、自惚れている。そこでここに嘗て思い浮かんだことどものうちから、幾つかを拾い上げて見たい。

(一) フリガナ欄

私にはじめての子供が生まれたときのことである。昭和十五年夏のことであつた。男の子なので「英紀」と命名し、これを漢音で読むことにしたいと思つた。

そこで奉書に墨で出生届を書き、名前にエイキと仮名^{カナ}を振つて市役所に届けた。ところが翌の日になって、派出所の巡査が駆けつけて来て、あなたの出した出生届の名前に仮名^{カナ}が振つてあるが、これがそのまま受理されると、あなたの息子は一生自分の正式の署名には、カナを振らねばならぬことになる。それでよろしいかとのことである。私の任地は当時関東州旅順市であつた。巡査が出生届の面倒まで見てくれるとは、当時はよほど平穩無事な町だったのであろう。もとより私には、息子に一生名前に仮名^{カナ}を振らせる気など、毛頭なかつたので、奉書を一枚無駄にして、カナを振らない出生届をあらためて出し直した。これで事務的には一件落着したわけだが、私の胸にはなんとなく納まらないものが残つた。

親がわが子に名前をつけるとき、どういう漢字を選ぶかについて、とつ追いつするのが普通であろうが、一旦きめた漢字をどう読むかも、当然考えるである

う。幸か不幸か漢字には、幾通りもの読み方がある場合が少なくない。そこで私は英紀の英はエイであつて、ヒデではない、紀はキであつてノリではないという積りで、エイキとカナを振つたのである。それがいけないとなると、親が意図した吾が子の呼び名を確認する拠り処が、戸籍謄本には何処にもないことになる。これはおかしいのではないかという思いが、あれから半世紀経つた今も尚、私の心中にくすぶり続けている。

浜口雄幸の名はオサチ、安倍能成の名はヨシシゲ、原敬はハラタカシというのが、夫々の親の決めた呼び方だと聞いている。西田幾太郎はキタロウかイクタロウか。平安時代のやんごとなき女性の名は、定子はテイシ、詮子はセンシ、明子はメイシなどと学者たちは呼んでゐるらしい。これも親の考えとは違ふのではないか。親がなんと呼ばせたか確かめる典故がないからということなら、それこそ目下の問題そのものである。過去はどうにも仕様がなとして、将来のために、確認のよすがを設けるのが当然の策ではあるまいか。話は簡単である。戸籍の原簿の姓名の欄に、発音表記の、つまり仮名遣の欄を設ければ済むこと

だ。

われわれの日常生活では、役所の諸届、銀行の諸用紙、あるいは各種の申込書のたぐいには、必ずといってよいほどフリガナ欄がある。それだのに肝腎かなめの戸籍の原簿にそれが無いというのは、なにか筋の通つた、もつともな理由でもあるのであろうか。

それにつけてもわが国の国号は「日本」だけれども、これがまたニッポンとも読め、ニホンでもある。

ジャパンもヤープンもハポンも元は「日本」に由来するのであろうが、外国語の発音のことは兎に角、例えばわが国のスポーツ選手のユニフォームに、Nipponとあつたり Japan とあつたり、何れを振ぶかはその競技団体の恣意に委されているらしいのも、気にすると妙に気になる。国号は漢字で「日本」と決めた以上、それにどんなカナを振るかはお好み次第ということか。そうだとすると人の名前の方も、漢字さえ扱えばそれをどう読もうと勝手次第というわけで、原簿たる戸籍謄本にも、あえてフリガナ欄を設けることはしないという方針(?)かと臆測される。しかしそれでは日常生活上は不都合なことが起こり易いので、実務上の書類の方は必ずフリガナの欄が設けられているの

であろう。実務優先、原則は二の次、これが日本文化の一大特徴と、私には思われる。

コトバはもと spoken language (ハナシコトバ) であつた。文字が発明あるいは輸入されて written language (カキコトバ) が生ずるまでには、随分な年月が要つたと思われる。Written language は一部特権階級やエリートたちの道具であつた時期が、これまた短かいとはいえず、外ならぬわが国でも、私の少年時代には、周囲に文盲は別に珍らしいことではなかつた。「世界第一」の経済大国になつた今でも、漢字が本字 (ホンジ) でカナは仮の字という意識が色濃く残っているらしいのも、そうした過去のイキサツによるのであるが、もうこの辺でせめて人の子の呼び名は、親の意向を尊重する方向に、軌道修正を願いたいものである。

ついでに記しておく、私が三十数年前に初めて家を建てたときのことである。登記というものをするのに必要とあつて、市役所に印鑑証明なるものを貰ひに行つた。その窓口で私は「あなたの姓のワタナベのナベは、方の方ですか口の方ですか」と尋ねられた。私には全く初めての経験だったので、一瞬間の意味を

測りかねて、キョトンとした。日常的には私は「渡辺」と署名していたが、登記などというムツカシイことになると、「辺」という略字では不都合だろうと、画の多い字を書いて書類を提出した。するといきなり上記の質問である。つまり戸籍簿に記載されている「ベ」の字は「邊」か「邊」かというのである。結局私は東京から五百数十キロ離れた本籍地の市役所に、問い合わせの手紙を書く羽目になつた。その返事が届くまでの数日の間に、私は手許のハンコを一つ一つ調べてみた。私が大学に入つた記念に、父が作らせてくれたハンコは「邊」になつており、外に略字の「辺」もあつたが、「邊」は一つもなかつた。ところが送られて来た戸籍謄本は、「邊」ではなくて「邊」となつていた。手許の漢和辞典を調べてみると、「邊」は「邊」の略字だそうである。そんならこれからは本字の「邊」と書くことにしようと思つても、そうはいかないのだそうで、戸籍謄本に載っている字が私にとつての「本字」なのだそうである。

この辺のいきさつについても、私には今もって、筋の通つたような、通りそこねたような、モヤモヤした感じが残っている。

そういえば文語訳聖書の旧約の部は、大層むつかしい漢字が連なっていて、漢字の方だけ読むとチャンと読みが降らないところが到る処にあるが、いわゆるフリガナの方はスラスラと話がわかると聞かされたのは、もう随分むかしのことになる。日本で聖書を初めて本格的に翻訳しようとしたとき、日本側は漢文体に訳すことを提案したが、アメリカの宣教師たちは、「それはおかしい。本来の日本語に訳すのが当然ではないか」と主張したものだそうである。その主張が通った結果が旧文語訳であって、それはフリガナではなく、フリ漢字になっているのだという。

元始はじめに神天地かみてんちを創造つくくりたまへり 地ちは定形かたちなく
曠むな空なしくして黒暗淵くろあんえんの面おもてにあり神かみの靈水れいみづの面おもてを
覆おほひたりき

という創世紀冒頭の二節を見れば、早くもそのことが歴然と判る。句読点が一切ないのも序でに注意をひく。

要するに日本人は、千年の昔已れを空しうして、中国の文化を摂取した名残りを、今以て色濃く残しながら

ら、百年前からは今度は西欧の文化に急激に傾斜して、当節はカナモジが氾濫しているというわけであるが、もうこの辺で日本語の表記法一般について、底をついた、合理的な原則を打ち出すことにしてはどうであらうか。私は数十年前に同僚のアメリカ人から、「日本はどうして歴史的仮名遣を簡単に棄ててしまったのか。外国人の日本語学習に大変タメになったのに」と言われて、返答に困ったことがある。私は現代仮名遣に今さら真向から反対する気はないが、国字に限らずその場逃れの、対症療法的なやり方で、万事を処理するのがクセになっているように見える、わが国の風潮が気になるのである。

(二) 年 賀 状

年賀状はお正月の三ケ日の間に届くものと、大抵の人が思いこんでいる。暮のうちに着くなどは、とんでもないこと、松の内が過ぎてから配達されるのは、気の抜けた話、ということになっている。

昨今は郵便物がムヤミに増えた。ことにダイレクトメールの数は莫大である。手紙、ハガキの類の配達

は、機械化の仕様がなから、最後は人手に頼るほかない。受取人がロクに封を切っても見ないような印刷物を、連日ドッサリ配達させられる郵便屋さんは、内心穏やかならぬものがあるのではあるまいか。中でも年賀状は、近頃は元日と三日に集中的に配達されるようである。何しろ人口が増えていることでもあり、年賀状の総重量も増す一方だろうと思われる。

これは一種の人権無視ではあるまいか。

お正月といえば、一般の日本人は年二回の大骨休めのうちでも、格別寛ろく時である。トソ機嫌でデレツとして各戸に、日頃にも増して嵩張って重い荷物を背負って、配達に来てくれる郵便屋さんに、私は年来恐縮している。何とかならないものかと思わずにいられない。急場凌ぎに備われたアルバイト学生などが、何百通かの年賀状の束を、道端の竹藪に捨てたなどというニュースも、近頃は毎年のように聞こえてくる。「不法投棄」はもとより困ったことには違いないが、一面無理もないという気もするではないか。

私のようなひと見知りをする、世間の狭い人間でも、暮にはアジア、アメリカ、ヨーロッパなどの諸外国へ、何通かのクリスマスカードを出すような世の中

になった。先方からも届くが、これが十二月に入ると早々に着くのもあり、大半は二十五日のクリスマスデー以前に間に合わせるように配慮されているようである。年を越してから届くのも毎年何通かはあるが、時期遅れの年賀状に対するような違和感はない。

そこで私の提言は、すでにお察しの通り、年賀状の「有効期間」を、クリスマスカード並みに拡げてはどうかということである。お正月といえばむかしはヨソ行きの晴着を着て、常日頃とは違った御馳走を食べ、際立って特別の期間であったが、暖衣飽食時代の今日では、別に取り立てた季節感もなくなっているのではなからうか。近頃は毎日がお正月のようなものだ。そうだとすると大部分の人がリラックスしている時に、一部の人に文字通り「重荷を負わせる」のは何とか避けた方がよいのではないか。私にはどうも現在の年賀状にまつわる習慣は、大ゲサに言えば民主主義の見地からも、見直しの時期に来ているように思えてならないのである。

(三) 濁点・半濁点

年が寄ると大抵の人が視力が落ちて、困ることがいろいろ、数々ある。例えば電車に乗ろうと思つて駅で運賃表を見上げるが、高いところに小さい字で表記されているので、いくら瞳を凝らしても数字がハッキリ読み取れない。薬の効能書きも眼鏡を持ち出さないと、用が足りない。もっと困るのが新聞雑誌に出てくる、仮名についている濁点、半濁点である。これは必ずしも年寄りが難渋しているだけとは限らなさそうに思ふのは、中年若年の面々の中にも、この二つの記号を取違えている人が珍らしくないからである。プロマイドをプロマイドと言ふのは、もう殆んど固定していて、プロマイドは今ではレッキトした日本語なのかもしれない。メダルとメタル、キャンパスとキャンパス、ベンチとペンチ、ペダルとペタル、ビートとピートは本来意味が違ふし、モノが違ふことも、どうもハッキリ意識されてはいないようである。野球の試合で、走者を進塁させるためにするバンドも、しばしばバンドと言われて、「バンドの辺へ来た球を、いきな

りバンドしたら、小飛球になったので、相手はわざとグラウンドにバンドさせた」などということになる。パラソルをバラソル、コックピットをコックビット、シンポジウムをシンボジウム、パラボラをバラボラなどという例に出会つたこともある。パスを忘れてパスに乗つたなどという話もある。パイをバイと発音されると途端に食べる気がしなくなる。私が子供の頃、シベリヤ出兵ということがあつた。その当時日本の軍や民間人が、バルチザンに襲われる大小の事件が起つた。私の周囲のオトナたちはこれをバルチザンと呼んでいた。これは英語でいえば *partizan* のことであらうから、もとより正しくはバルチザンの筈だが、子供の私にはそんな詮議立てをする能力はあろう筈もなく、只バルチザンと覚えこんで薄気味悪い思いをしていたものである。これらの例はすべて、濁点、半濁点がハッキリ読み取れないところから起る間違いではあるまいか。

そこで例えば半濁点は○、濁点は□とすることにして、ア①レ②トル、③④ルス、⑤レハ⑥、⑦ター⑧ユ、テトラ⑨⑩てな具合にでもして貰えれば助かるがなと、これは年と共に私の切実な願ひになつてい

る。表記法は別にこれに限ると思つてゐるわけではない。見易くて正確が期せられる方法がほかにあるなら、勿論それで結構なのである。

これに関連して思うのは、むかしあつた、あるいは方言の中に今も生きてゐる、[f]、[t]、[d]などの音を復活させてはどうかということである。[f]音では、ファン、フェルト、フィルム、オフイスをやめて、ファン、フェルト、フィルム、オフイスと発音することにしてはどうか。ファンファール、フィクション、フィードバックなど、比較的新しく採用されたコトバの場合は、[f]音がほぼ正確に発音されているのだから、その気になればできない筈はなからう。困るのはコーヒーである。これは私の尊敬する先生が、日本語の会話の中でもコフィーとおっしゃるのに閉口した経験があるからである。[t]音については、ティースプーン、ティーショット、ティッシュュー、ティピカル、ティファニーなどは、大体チャンと発音されているのだから、テケットはティケットとし、テケツは一部の職業あるいは階層に特有の発音と考へることにしてはどうか。野球用語などによく使われるチームは、いままさらチームでもあるまいか。テラピア、チーク(木材名)、ツ

リー、殊に地名のチゲリス、チチカカ、チロルなどは、改めると言う方がキザかもしれない。只チップとティップはモノが違うことは留意した方がよいと思ふ。もう一つ加えれば、ツァーは観光旅行のこと、ツァーは旧ロシアの皇帝のことである。[d]音でなんとか改めたいのはデズニールランド、これは是非ディズニーと発音して貰いたい。デジタルもできることならデジタルと発音したい。デキシールは何としたものか。ディクシーと言ひ直すことには抵抗があるのかもしれない。ディスプレイ、ディスプレイはなんとか無事なように思うが、DDTは英語風とドイツ語風があると認めるか。デスクーデスクーデスクはそれぞれモノが違うから、ハッキリ発音しかえる必要があらう。

このほか野球放送でよく聞くグラウンド、ホール、チェンジなどは、もとはグラウンド、ファウル、チェインジなどと二重母音の筈だが、日本語には二重母音はどうもなじみにくそうである。只化粧品関係のファンデーションは、私にはなんとも気になるのだが、ファンデーションと言へという方がムリというものか。

もう一つ付け加えると、アクセントの置き場所の問題である。近頃は女性の社会進出が旺んになって、キ

キャリアウーマンが増えたのだそうだが、このキャリアは career で、アクセントは後半にある。キャにアクセントを置くと carrier となつて、「運ぶ人あるいは道具」という意味になる。それにこだわればキャリアウーマンはキャリアマンと表記した方がよいことになるのだが、ファクシミリも、アクセントは元はファではなく、シのところにあるわけだが、ファックスと短縮してしまえば、アクセントの問題はなくなる。天下の珍味と謳われるキャビアは、私がシェイクスピアの演習で習ったときは、最後のアにアクセントがある、従つてカピアーと発音すると教つたものだが、これは日本式のアクセントも認められているらしい。シェイクスピアといえば、中学四年のとき、チャールズ・ラムの『シェイクスピア物語』が教科書になつて、マクベスはベスに、オセロはセにアクセントがあると、懇々と念を押された想出がある。そこで私はいまだにオセロは強精剤の商品名、オセロは悲劇の主人公のムーア人の名、マクベスの方はマクは子孫という意味の接頭語だから、原則としてそこにアクセントはないと覚えてゐる。

(四) ゴルフ場

私は終戦で関東州（遼東半島）から引揚げた当座、関西の私の生家のあつた一帯が、終戦間際の大空襲で焼野原になつたせいもあつて、取敢えず茨城県の家内の実家に居候することになった。敗戦直後の食うや食わずの時代である。肩身の狭い思いをしながら、就職運動に右往左往した揚句、官舎が貰えるというのが何よりの魅力で、日立のそばの工専に一先ず職を得た。やつと水入らずになれた私の耳に、やがて近所にゴルフ場造成の話が持ち上つてゐるという噂が聞こえて来た。それもその辺りで一番収量の多いといわれる美田を潰して、ということである。私は無性に腹が立つた。

私は学生時代に仏文の辰野隆先生から、ゴルフは大変良いスポーツだが、若い間は外のもつと体力の要る、激しいスポーツを楽しむがよい。ゴルフは独りでもできるから、老境に入つてから悠々と、体力に合わせて楽しむために、取つて置いた方がよいと伺つたことがあり、それを至極尤もなことと思つた覚えがあ

る。従ってゴルフというスポーツそのものには、好感を持ちこそすれ、敵意などは今もって抱いてはいない。しかし当時は事情が違っていた。買い出しとか配給とか、今の若い世代には何のことやら判らぬかもしれぬ、切迫した食糧事情の時代であった。中でも米は大変不自由な統制下にあつて、毎日の糧を整えるのは、容易なことではなかつたのである。

ゴルフ場を造ることが、政治家たちの旺盛な「企業精神」に叶う事業であることなど、当時の私には思ひも寄らぬことであつた。私は只々米の穫れる稲を育てる田んぼを、一スポーツのために取潰すということが、当時の実状に全然合わない暴挙としか思えなかつた。私は思い切つて抗議の投書を、地方紙に送つた。勿論没書である。発起人のエライ人たちは、そんなことを言う奴は「アカ」だと仰言つたと、後になつて仄聞した。「アカ」とは何とも便利なコトバだなど、私はあらためて腹が立つた。ゴルフ場は流石にそのときは沙汰やみになつた。今日の隆盛ぶりを考えると、当時の政治家のセンセイ方には、流石に大変な先見の明がおありになつたものと、敬服の至りではあるが、今日は今日でゴルフ場の造成は、別の意味で、一般民衆

から快く思われていないことも事実であろう。当面はゴルフ場の広い芝生に撒かれる、大量の農薬の害が焦点になっているようで、これも尤もなことではあるが、今日私があらためて不愉快に思うことは、ゴルフというスポーツが、スポーツの域を踏み外して、投機の対象に摺り替っているらしいことである。ゴルフのクラブなど一度も握つたこともないゴルフ狂が相当いるとは、何たることであらうか。

Sport という語は disport さらに遡ればフランス語の desporter から、di- あるいは de- が落ちた形だそうである。本来は身を処すとか、遊び戯れるとかという意味なのだそうである。リラックスして遊ぶ筈のものが、金儲けにしのぎを削る材料になるとは、ゴルフにとつてもとんだ迷惑に違ひなからう。

私はビズネスマンの息子に唆かされて、只二度だけ、あの大きな蚊張の中みたいなゴルフ練習場に出掛けて、ボールを叩いてみた経験がある。見た目ほどには事は簡単でないのがすぐ判つて、元来スポーツが嫌いでない私には、これは面白そうだなという気が強くなりました。病みつきになりそうな気配を感じた。思い止まるなら今のうちだと思つた。お蔭で私は辰野先生の遺

訓にそむいて、老境に入った今もゴルフとは無縁の生涯を送っている。行きがかり上仕方ない成り行きなのである。

一介の英語教師として半世紀を過ごしてきた私は、嘗てゴルフというスポーツを発明したイギリスと、わが日本の面積を較べてみたことがある。Great Britain と呼ばれる、イングランドとウエールズとスコットランドの三地方から成る島は、総面積が日本の三分の二しかないのだが、その八割が平地で、山といつても一番高い Ben Nevis (スコットランド中部にある) でさえ、一三五〇米に足りない。大菩薩峠より五〇〇米以上低いことが判った。それに引換えわが日本は、総面積の八割が山で、平地は二割しかない。つまりイギリスと日本は、平地と山地の割合が丁度逆なのだ。そこで私はイギリスは狭くて広い国、日本は広くて狭い国と心得ることにしたものであった。

ゴルフ発祥の地といわれる、スコットランド東海岸のセント・アンドリュースへも行ってみたが、そこは一見したところ海辺の只の草原で、別に取り立てて人手をかけた、整然たる様子には見えなかった。セント・アンドリュースは名うての難コースだと人は言うようだ

が、素人の私に言わせると、それはろくに手入れもせずに、雑草を茂るにまかせているに近いせいではないか、ということになる。あのままでは昨日と今日でリンクスの状況が微妙に違うというのも、従って「難コース」であることも、私なりに納得できる。プロ中のプロの御指南を仰がなければならぬというのも、至極御尤もと頷かれる。

ゴルフ場の面積は大変広い。私がむかし血道をあげた草野球のグラウンドなら、十何面かはとれそうな気がする。そのゴルフ場をこの狭い国土の到る処に、耕作可能面積が全面積の二割しかないという国の、山中まで、自然を傍若無人に破壊してまで、強引に、いやが上に、造り増して行くというのは、些か異常ではあるまいか。今全国には千八百ものゴルフ場があり、これからも尚ふえて行く情勢であるという。バランスを失っている。不健全である。

息子が出向していた時期があつて、それを好機にオーストラリアとニュージーランドを見物に出掛けたことがある。オーストラリアではその面積が日本の二十数倍あることや、資源の豊かさに驚嘆させられたし、ニュージーランドは風光明媚、大気清澄、人情淳朴、

すっかり気に入ってしまった。いずれの国でもゴルフは庶民の日常のスポーツの一つで、日本の百分の一ぐらゐの費用で楽しめるらしかつた。私も案内してくれた車の運転手君は、ヨットも持っていて、アフターファイブに気楽に楽しんでゐるとのことであつた。こちらが羨しがるのが腑に落ちないという面持であつたが、これがスポーツの本来の姿というものではないのか。息子は日本に戻つてからは、パッタリゴルフをやらなくなつた。スポーツは身銭を切つてやるものだと、睨みを利かず親爺がまだ生きてゐるせいでもある。

そう言えば近代オリンピックも、あと数年で満百年を迎えることになるそうだが、この際紀元前八世紀のむかし、ギリシャでオリンピック競技が始まつた時代の、基本精神を思い返した上で、オリンピック元年をあらためて創めることにしてはどうであらうか。東京大会のとき、私は家族全員を引連れて東京を離れ、夜叉神峠の絶景を眺め暮らしたものであつた。

(五) 公 害

公害という言葉が使われ出したのは、そう古いことではない。それが言われ始めたのは、まず最初は工場から排出される有毒物質についてであり、その次が農薬の多用から起る害についてであつた。それらをひくくめて公害というようになったわけだが、私はこの「公」の字に問題を感じている。工業とか農業とかの産業活動が生んだマイナス面を、「公」害と呼ぶ意識には、異議がある。

何が問題か。

狩猟による食料採集の時代に続いて、数千年あるいはそれ以上の農耕の時代があり、工業の時代は高々数百年を経ているに過ぎない。しかしエネルギーの面からみると、産業革命以後のエネルギー消費量は、それ以前数万年の消費量に、ほぼ等しいといわれている。これはつまり、ホモサピエンス特有の生産手段たる工業によつて、われわれは急速且大規模に、地球のエネルギーを搾取してきたことである。ルネサンス期以後、自然科学とそれに基づく技術の発展は目覚ましく、十九世紀の人類は無邪気にそれを謳歌し、その恩恵を讃美したが、今世紀に入つて第一次世界大戦を経験し、さらに第二次大戦を避けることができなかつ

たにつけ、醒めた人々は技術の偉業には猛烈な搾取の側面が潜んでおり、しかもその搾取は人類それ自身をも捲きこんでいることに、気付き始めた。しかし一般民衆の民度は、未だこの自覚に到達するほど高まってはいない。諸種の企業が排出する悪気流、汚水、毒物を、「公害」と称する意識には、自ら携わっている産業活動に対する自負と、そのマイナス面については、現実とそれに対する責任を、正面から認めようとしないう、逃げの姿勢が感じられる。

戦時中の話である。私が当時勤めていた工科大学で、ある日採鉱学科の中堅プロフェッサーが私の宅に遊びに来てくれた。そのときあなたは今何を研究しているのかという私の質問に対して彼は、自分は撫順の炭坑に度々出張して、採炭用のバケツにつけるロープに関する研究をしていると、教えてくれた。私は好奇心をそそられ、感心もしたが、つい「そんなに一所懸命掘ったら、そのうちに石炭はなくなってしまうね」と言ってしまった。私は彼が何々大笑するだろうと予期したのだが、案に相違して、彼は真赤になって怒り出し、「石炭は掘れば掘るほど出る。ウソだと思いうなら年鑑かなにか持って来てみる」と言った。私が手許

の年鑑を持ち出すと、彼は出炭量の統計の部分を開いて、私に突きつけた。なるほど石炭は年々増産されていた。しかし私は相手の言分にすぐには承服しかねて、「それでもやっぱり石炭はなくなる。モノは使えばなくなる」と呟かざるを得なかった。終戦とともに彼は引揚げて、東京の名門大学に復帰し、やがて勲二等を貰った。石炭は戦後の復興の花形であった。そして年を経て九州でも北海道でも閉山が相次ぐようになった。私の思いは複雑であった。

もう一つ想出を語ろう。これまた前記の大学でのことである。今度は機械科の主任教授を交えた数人の対話の中で、私がどういふキッカケからであったか、「世間の人たちは、文学などというものをやっている者のことは、年中遊んでる位に思ってるかもしれない」と呟いたところ、件の教授は「え、遊んでるんじゃないのか」と、ひどく真顔で問い返した。お蔭でそれから暫く私は、遊ぶとはいかなることかと、芭蕉やシラーを勉強することになったものである。

これら二人の教授は共に、自分の仕事に対して満腔の自信に溢れていて、それは至極立派なことであり、羨しくもある位のものだが、他面彼等は工科万能思考

を脱し得ず、他方面の仕事をしている人たちについては、まるで無理解であり、時には軽侮の念すら抱きかねないでいたことになる。ここが問題なのである。これら二人の教授は、夫々専門分野で大企業と密接なつながりを持っていた。企業人もまたこれらの教授同様、自分たちこそ日本国を背負っているという自負に満ちていたわけで、その反面、工業あるいは産業一般の醸し出す害毒の面については、まるで自覚がないか、薄々感付いていても、見て見ぬ振りをしていたことになる。公害という語はそうした情況から生まれたと、私には思われてならない。

この潜在意識をはっきり自覚させ、より広く、拓かれた境地に導くには、大変な手間と時間がかかる。江戸時代三百年は、日本が中世的な封建社会から脱皮して、近代精神に目醒めるための、手間と時間をかけた時期であったと言える。その準備があったればこそ、明治政府は、際どい綱渡りのような冒険を重ねながらも、日本の近代国家への途を、首尾よく拓くことが出来たのである。「富国強兵」を旗標にした明治時代は、今日の「経済大国」を築くための基礎固めに、手間と時間をかけることに集中した時代であっ

た。一八五〇年生まれで、今年が来日丁度百年目に当たるラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、日本のこの傾向にアンティテーゼを提出し、反省を促そうとした人物であったことが、今にして振り返られているわけであろう。

およそ生あるものには、必ず自己保存の本能がある。自己を保存するためには、何故か他己を犠牲にしなければならぬ。闘争本能なしには生き残れない定めになっている。毎週のように放映されるテレビ番組が示す通り、草食動物は植物を、肉食動物は草食動物を、エサにすることによって生き延びる。弱い者、病氣や怪我をしている者がまず餌食になる。動物の一種であるホモサピエンスの集団にも、この原則は働いている。どの国の歴史も弱肉強食の地獄凶絵の連続であった。テクノロジーの発達によって、この地獄凶絵は解消するどころか、凄惨さを加えている。只ホモサピエンスの場合は、他の動物と違って、いわば自然から抜け出して、自然を客観視する方法、つまり科学を発達させ、それに基づく技術の急速な開発によって、本能を昇華させる途を拓いてきた。その結果、営利を目的とする諸企業が盛んに興り、それが結果的に国を富

ませることになって、十九世紀のイギリス、二十世紀のアメリカ、やがては現代の日本といった、所謂「先進国」を生むことになった。その主流は工業であり、経済であるということになる。従って現在、軍人に代って企業人や経済人が誇りと自負に満ちるのは時の勢いで、無理もないことではあるが、テクノロジーや経済の底には、原始の自己保存の本能や闘争本能が、生々しく生きていたのであって、最高の価値観はもっと別の、もっと先のところにあると考えるべきである。

換言すれば、産業も経済も、元々はエゴイズムの原理に貫かれているのであって、エゴイズムはやがて超克されなければならぬものである。工業や経済は本来、ホモサピエンスを生き延びさせるための機能に属するものであって、人には更に実存の世界があることが、漸く人類の課題となる兆しが見え始めている。機能はモノの世界であり、実存はココロの世界である。

人類はすでに古代において「捨身養虎」とか、「汝の敵を愛すべし」というような発想法を見出ししていたが、それを生存の基本とする境地には、現在も尚程遠い。自己保存に汲々とし、機能にこだわる状況を抜け出ていない。抜け出る可能性を将来に期待すべき状況

にある。現状はエゴイズムを基本とする、機能主義、商業主義を至上のものと思ひ込んでいる。マルクスの、本来はヒューマニスティックな思想体系も、時代の趨勢に偏曲されて、経済の面ばかりが注目され、強調される結果となり、ひいては先祖返り現象を起こして、スターリンというエゴイズムと権威主義の権化を生んでしまった、と私は思っている。現在日本の政治家たちが右往左往させられている、コメの自由化の問題にしても、日本にとってコメは、商品であるよりも先に、自らが生き残るための基本材と考えているのに、アメリカにとってはコメは、日本をはじめとする外国に、できるだけ有利に売りつけたい商品でしかないところに、行き違いの根があるのだ。日本の民族がまだ、それを認識できない程度の低さ、浅さに止まっているために、話がつれていなのだ、断ぜざるを得ない。現在はあらゆるものが商品、つまり金儲けの材料にされる。この傾向は機能優先、つまりエゴイズムの合理化であって、実存を忘れた退行現象である。公害というコトバも、正にこのエゴイズムを合理化しようとする意識の産物なのである。

ソ連の最近の動きを見ていて思うことは、民度を上

げるためには「跳び越し」は禁物らしいということである。ソ連も中国も、資本主義はおろか、中世的な權威主義、封建制すら超克しきらないまま、資本主義の段階を跳び越して、共産主義に移行しようとしたが、民意の程度がそれを許さなくて、今になって資本主義の課程を学習し直そうとして、混乱を起こしてしまっているのではないかと思う。従って所謂資本主義側は、それ見たことかとはばかり、共産主義の失敗を笑い、資本主義こそ正しいのだと短絡的に早合点してはならないであろう。資本主義にも原始的なエゴイズムの根が、依然として残っているのだからである。旧共産主義国の状況が激しく揺れ動き始めた今日、東西ドイツがアレヨアレヨという間に、見事統一を遂げた例にならって、資本主義国は旧共産主義国を、平和裡に自己の陣営に吸収し、相共に次の、より高い段階に向かって、民主的に前進しなければならぬ。

そう思っている矢先に、降って湧いたのがイラクのクウェートに対する武力による侵攻である。これは明らかに激甚な退行現象そのものである。天安門事件以上の先祖返り現象と言わざるを得ない。

アラブ諸国の民度は、ソ連のそれより高いとは誰も

思うまい。その程度の国民を基盤にして事を起こしたイラク大統領は、私の眼には神がかりを装った權威主義者、利権漁りのエゴイストとしか映らない。アラブ世界は私の体験では、掛引き万能の社会、都合次第ではアラアの神まで臆面もなく助ッ人に担ぎ出すところだけが、旧共産社会と違うが、あとはスターリン主義そっくりの社会としか見えない。アメリカをはじめとする西側諸国も、そう思えばこそ間髪を容れず、大軍を催してイラクを包囲したのではあるが、この際武力衝突を起こすと、イラクは最後には化学兵器や細菌兵器を持ち出さざるを得なくなるだろうから、結果はチェルノブイリの事故の後遺症に似た事態になるのには目に見えている。ケンカというのは、百パーセント勝つ見込のある場合にだけするものだ、私は思っている。勝負が確実なケンカの場合、相手はそれとなく遁げ途を作ってやる心の余裕が、こちらにはあることになる。この際も是非フセインに、面子を潰さずに逃げる途を備えてやってほしい。

然らばその途とは何か。

妙案はどうやらどの国の指導者にも、今のところ持ち合わせがないらしいが、この際一つ言えることは、

フセインも西側のリーダーたちも、国境というものが今ではすでに過去の遺物にすぎなくなっていることを、この際明確に認識し、立場は違うにせよ、そこを出発点に、平等の立場で、解決策を見出してほしいということである。重大化してきた環境問題が明瞭に示している通り、放射能にも酸性雨にも国境はないのである。原子兵器も同様である。この際国境にこだわったり、閉じ籠ったりするのは、為政者の独善的なエゴイズムである。国境とは、所詮ヤクザの縄張りと同質の代物であって、一日も早く葬り去らなければならぬ廃物である。そこにリーダーたちが気付いたればこそ、ヨーロッパ連合も進展し、米ソ両陣営も冷戦態勢を解いたのに違いない。いや、それは経済問題が根幹だと人は言うかもしれないが、経済問題、つまりモノの問題が最終的に解決するのは、各国が国境を越えてココロを通わせたときである。ホトケもエホバもアラームもみなそれを願っている。

工業に起因する害は公害であり、農業に原因があるのは農害である。土地ブローカーの目に余る「活躍」による害はなんと呼べばよいのか。金融機関が深刻に

からんでいるらしいから「金害」とでもするか。とにかくこれらはすべて「公害」ではない。十月四日付の朝日新聞の「天声人語」によれば、近頃は「公害という言葉をあまり耳にしなくなった」そうである。これが民度の向上の徴しるししであればよいがと思わずにいられない。

(一九九〇・一〇・三〇)